

デキタテほやほや国立公園、奄美群島四島ツアー

S46商 小柳正純

1日目 《与論島》 いきなりクライマックス百合が浜

「旅を楽しむ会」の春のツアーに参加、奄美の島々を巡った。4月14日朝、羽田空港に



集合。8時過ぎ羽田を離陸、鹿児島空港でプロペラ機に乗り継ぎ、与論空港へ向かう。眼下に噴煙上がる桜島、やがて奄美諸島が次々と。昼過ぎにサンゴ礁の島、与論島に到着した。半世紀前になるが、大学生最後の夏にこの島を訪れたことがある。沖縄返還前のこの島は日本最南端の島だった。懐かしい。当時は鹿児島港から一昼夜の船旅、今回は鹿児島空港から空路で2時間かからない。ハイビスカスとブーゲンビリアの花が出迎えてく

れる。今夜の宿泊先、プリシアリゾートヨロンに立ち寄り、昼食の後、初日の観光をスタート。まず「与論民俗村」。御家族で運営している与論島の資料館だ。黒糖作りと手造り民芸品を見学、パイアの漬物や黒糖をいただいた。干潮の時を見計らい、いよいよ大金久海岸の「百合ヶ浜」へ。潮流で砂がゆり（寄って）、干潮の時だけ沖合に現れる真っ白な砂浜だ。遠浅の海は白砂を透かしエメラルドグリーンに輝いて



いる。コーラル岩礁の沖合には濃紺の東シナ海が広がっている。百合ヶ浜にはグラスボート



で渡る。船長さんのアドバイスで靴を脱ぎ、ビーチサンダルに履き替えグラスボートに乗る。15分程で百合ヶ浜に上陸。歳の数だけ持ち帰れば幸運が訪れるというサンゴの星砂探しに熱中する人も。いきなり旅のクライマックスだ。潮が満ち始めてきた。グラスボートに再び乗り込み、透き通った水中で泳ぐ熱帯の魚をボートの底から観察する。ウミガメがゆうゆうと回遊している。振り返ると百合ヶ浜はすでに姿を消

していた。初日の観光はこれにて終了、白と青の南国調のリゾートホテルに戻る。与論島の姉妹都市、ギリシャのミコノス島をイメージしているとか。水平線に沈む夕陽が美しい。与論島特産の黒糖焼酎に酔いしれながら夕食。食事を終え、輝く満天の星を眺め南十字星を探しながらコテージへ。



2日目 《与論島》《沖永良部島》

与論島内に道路の信号は一つだけ。収穫したサトウキビをいっぱい積みあげたトラックが走りまわっている。バスはゆっくり安全運転だ。「ゆんぬ・あーどうる焼窯元」「赤崎鍾乳洞」「与論城跡」を回り資料館「サザンクロスセンター」へ。5階展望台から島内を一望して資料館を見学した。館内に民謡が流れていた。センターで受付をしている女性の三線弾き語り、ライブ演奏だった。与論観光協会から来館者に星砂とサンゴの箸置き



た案内板はピカピカだ。奄美群島はこの3月に国立公園に指定されたばかりだ。波風の強い日は岩の底から潮が数十メートルも吹きあがるそうだが、この日は穏やかな海だった。次は左党にはたまらない「沖永良部酒造」の工場見学。地元産の黒糖焼酎の試飲は飲み放題。20度から40度までの各種を次々に味わう。ほろ酔いで選び抜いた焼酎を宅急便で送る。甘党は沖永良部特産のシノ桑茶を試飲する。「ウジジ浜」に並ぶ奇岩を見て、今夜の宿のおきえらぶフローラルホテルに入る。夕食の時に、たまたまこのホテルの別の宴席に演奏に来て

温かい島民のおもてなし



の贈り物、想定外のおもてなしがうれしい。午後、与論港から沖永良部島の和泊港まで2時間のフェリー旅。「日本一のガジュマル」がある創立118年の国頭小学校へ向かう。観光客に開放されている校庭には、横幅20メートルを超えて大きく枝葉を広げたガジュマル。多くの気根が幹を支えている。第1期卒業生が植えたというから樹齢は100年を超えている。次に潮吹き洞窟がある「フーチャ海岸」へ。国立公園と明記され





いた地元の高校生の音楽グループにお願いしたら、快く演奏してくれた。東北復興を支援するため、これから石巻に向かうという。エイサー、奄美民謡と三線、太鼓の元気いっばいの演奏、どうもありがとう。こういうサプライズが旅の楽しみのひとつだ。

3日目 《沖永良部島》 花と鍾乳洞の島



スマスツリーとかナイヤガラ（ナイアガラ）の滝とか名前が付けられている。きらきら光る方解石が美しい。次に奄美十景のひとつ「田皆岬」に向かう。断崖絶壁から海を見下ろす、身がすくむ。「世之主の墓」(初代の島主の琉球式墓)、「越山公園」を観光する。昼食を早めに切り上げ、メンバー

天気はまずまず。前日は大浴場のシャワーの湯がないトラブルもあったが、なんくるないさー、気にしない。道路の脇にはテッポウユリが咲き乱れている。ちょうどジャガイモ、サトウキビの収穫期で、車窓から収穫風景が見渡せる。島最大の観光スポット「昇竜洞」へ。全長3500メートル、そのうち600メートルが公開されている。

鍾乳石のオブジェにクリ



の大半は「西郷南州記念館」へ。この島に流刑されていた時に西郷隆盛は「敬天愛人」の思想を生んだとか。来年放送予定のNHKの大河ドラマは「西郷どん」だ。館内ガイドの説明に熱がはいる。2、3時間しゃべりそう。残念だったが、時間がなかったので15分ほどに短縮していただく。敬天愛人のロゴ入りTシャツを買うメンバーも。次に「笠石海浜公園」。なぜか本州では季節外れのコスモスが満開。ユリはもちろんフリージアも咲いている。



午後、和泊港から徳之島・亀徳港に向かう。フェリーで2時間弱。日も沈む頃にホテルはグランドオーシャンリゾートに入る。夕食はシャンパンの乾杯で始まり、黒糖焼酎を6本空にする。食後は有志がホテルに隣接したカラオケルームで自慢のノドを競う。熱唱に次ぐ熱唱、あっという間に二度の延長で盛り上がりました。



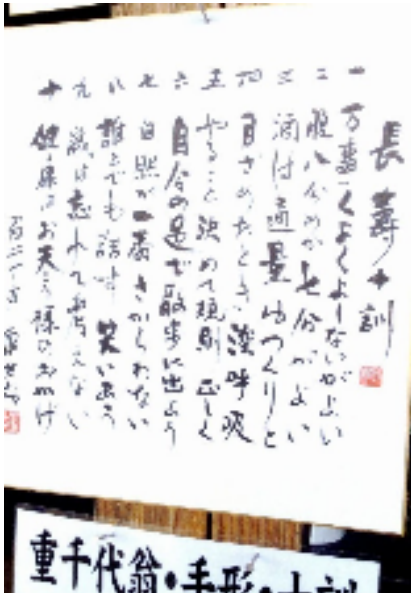
4日目 《徳之島》 長寿の島で長寿を願う

5年前にオープンしたドーム闘牛場「徳之島なぐさみ館」を訪れる。ビデオで闘牛ショーを鑑賞、牛小屋では来月デビュー戦を控えた闘牛が黙々とサトウキビを食べている。次は、ギネスブックで長寿世界一に認定された泉重千代翁の居宅、大きな銅像が出迎えてくれる。部屋に長寿十訓の色紙



が飾られていた。その一は「万事くよくよしない」。そうですね、参考になります。資料展示室には食生活のメニューが貼られていた。朝食で、もなか、シュークリームも食べている。晩酌を欠かすことはなし。毎日、黒糖焼酎を1合程度(焼酎3~4、お湯6~7の割合とある)飲んでいたようだ。次に、「犬田布岬」。戦艦大和の慰霊塔が建立され、毎年この地で慰霊祭も行われている。慰霊塔には戦没者の氏名が

刻まれていた。沖縄の平和の礎を思い出す。合掌。「犬の門蓋(いんのじょうふた)」では風や荒波で浸食



されてメガネのようにくりぬかれた岩が撮影ポイントだ。遠くからオカリナの演奏が流



れてくる。バスの運転手さんが寺島尚彦作曲の「さとうきび畑」を演奏していた。自己流で覚えたそうだが彼のおもてなしに感謝。「ムシロ瀬」は花崗岩が筵のように敷き詰められている海岸線の岩場で、カニや女性の横顔のような岩もあった。次は金見崎ソテツのトンネル。展望台からは東シナ海と太平洋が交り合うダイナミックな景観が望める。第46代横綱「朝潮太郎の銅像」を見て亀徳港へ。途中立ち寄ったおみやげショップの店横のガラ

スペースにハブが飼われていた。この旅行の最初で最後の出会い、ハブは奄美大島と徳之島に生息する夜行性で昼間はめったに出現しない猛毒を持つ蛇だが、ガラス越しに見ても怖い。

夕方、亀徳港を出て奄美大島へ渡る。フェリーで3時間半、午後9時前に暗闇の奄美大島・名瀬港に入港。旅行最後の宿は山羊島ホテル。大浴場には露天風呂もあり、名瀬の夜景が対岸にきらめいて美しい。



5日目 《奄美大島》 原生林、念願の田中一村記念美術館

ツアー最終日、曇り空、時折小雨がぱらつくが、傘を指すほどではない。まず「金作原原生林」へ。遊歩道を進む。まるで映画ジュラシックパークのような雰囲気だ。亜熱帯の巨大なシダが空を覆っている。道端の湧水でシリケンイモリが遊んでいる。樹皮がはがれたバクチノキ、ショウベンノキと書いた木札もある。樹林帯の先にはハブや天然記念物のアマミノクロウサギも生息しているとか。戦後一度伐採されたが、わずか50余年で再び密林となる回復力、高温多湿、自然の力に驚く。バス1台が枝を擦りながらやっと通る狭い曲がりくねった林道、世界遺産に登録されて観光客が殺到したらどうなるのだろうか。次いで「大島紬村」を訪ねる。警戒心の強い鳥ルリカケス一羽を発見する。地元の人でもめったに見られないとか。「旅を楽しむ会」はついている。工場では400近くの複雑な工程を細かく説明していただき、実際に作業を見せていただく。こんなに手間をかけているのだから、大島紬が高価なのも当然か。数十万円の



反物は皆さんスルー、おみやげにしゃれた小物を買っていた。奄美パークで昼食。隣接する「田中一村記念美術館」へ。館主は宮崎緑さんだ。メンバーの多くがこのツアーで最も楽しみにしていたスポットだ。孤高の画家、一村の生涯を紹介するビデオで理解を深めて作品を鑑賞する。ソテツやアダン、アカショウビン……など奄美の亜熱帯の風物を描いた作品はインパクトがある。日本のゴーギャンとよばれる

こともあるというが、一村は一村だ。日本画の伝統を超越した幻想的な画風は近年になって高く再評価されている。作品を実際に鑑賞することができて、このツアーに参加してホントによかったと実感する。この美術館訪問は当初の観光メニューにはなかったものだが、ツアー団長の岡川さんが旅行会社と粘り強く交渉して日程に組み込んだ。タフネゴシエーター、岡川さん、グッドジョブ。ミュージアムショップでは田中一村関連の書籍や絵葉書を買って求めた。「あやまる岬」、ソテツのジャングルをさーっと見て奄美群島ツアーは心おきなく終了。帰路は奄美空港から直行便、2時間で無事に羽田空港へ。メンバー全員ケガもなく、大きなトラブルもなかった。思い出も、おみやげもいっぱい素晴らしい旅だった。

